

# 交換留学派遣生 留学報告書



Ochanomizu  
University

WHO  
WHAT  
HOW  
WHEN  
WHERE

Experiencing the World

2

Issue 2, 2010

Study Abroad Annual Report 2010  
お茶の水女子大学グローバル教育センター



## 交換留学派遣生 留学報告書の発刊にあたって

**最**近、日本の若者が「内向き志向」になり、積極的に海外に出ていこうとしない点が政府の教育再生懇談会や科学技術白書などでさかんに取り上げられている。日本は他の諸外国と比べ、言語、文化の均一性が高いといえるが、このことは多言語、多文化化するグローバル社会に生きていく上で大きなハンディともなりかねない。また日本で生活する外国人の数も増えており、多言語・多文化共生はもはや日本もその例外ではなくなった。若いころから積極的に海外に出かけ、学びを得る環境を造成することは、今の日本とその若者にとって非常に重要なことであると言わざるをえない。このような現状認識と問題意識に立ち、本学では、グローバル社会で活躍できる女性人材育成のために、協定校の拡大や、交換留学、海外語学研修をはじめとした教育プログラムの充実に着手している。その結果、現在、海外の協定校は48校(2012年2月現在)に増え、2005年の時点と比べても倍増している。とりわけ欧州や東南アジアなど、これまで協定校のなかった国々の大学と次々と協定が締結された。このことは学生に海外留学において様々な選択肢を与えることにつながっている。



ポーランド、ワジェンキ公園ショパン像前にて

**派**遣留学生の数を見ても2012年(派遣生34名)は昨年(18名)、一昨年(17名)に比べて倍増しており、特に欧州とアジアへの留学生が増え、留学先もこれまでのように米英など一部の国に限られるということもなく、多様化が進んでいる。また交換留学を終えた学生の声を聞いて見ても、単に自身の専門分野だけでなく、グローバル社会に活躍する女性人材育成という点でも一回りも二回りも大きく成長して帰ってきていることがうかがわれる。

**今**回、このように交換留学生の留学報告書を発行することになったのも、学生時代に海外に出ていく意義と成果を内外に知っていただき、より多くの学生が、より充実した留学生活を過ごすことができるようにするためである。この報告書の発行が海外派遣のさらなるステップアップにつながる一助となることを祈ってやまない。

森山 新  
グローバル教育センター長

## お茶大からの留学

**私**たちグローバル教育センター(留学派遣担当)は、世界24カ国50大学に上る協定校とお茶大を結ぶ窓口として、皆さんの留学をバックアップしています。毎年4月・10月の留学フェアでは、「海外留学説明会」、交換留学派遣生OGによる「帰国報告会」や「国別相談会」等を開催するほか、センターやキャリアカフェにて個別の留学相談や情報提供に応じています。また、派遣が決定した皆さんに対しては、渡航前後のオリエンテーション(異文化適応・危機管理等)、留学中の安全確認や情報発信も行っています。お茶大からの留学には、「協定大学への交換留学(原則として半年~1年間)」と、春期・夏期休業を使って実施される単位認定プログラムである「海外短期(語学)研修」、協定大学のサマープログラムへの参加などがあります。交換留学はお茶大に在籍しながら協定大学に派遣されるもので、一部例外を除き、本学に授業料を納めることで交換留学先の授業料が免除され、履修単位も認定されます。交換留学派遣生の人数は2009年度まで10名前後でしたが、2010~11年度は各17名、2012年度には32名になり、センターでの留学相談件数も年々増加しています。お茶大生のグローバル化への意識の高まりに触れることができるのはたいへん嬉しく、誇らしいことです。また、長期休暇を使った海外短期(語学)研修は、現在、夏期はマンチェスター大学、春期はオタゴ大学、モナシュ大学にて実施され、各10名~25名程度が参加しています



ニューヨーク、ヴァッサー大学での国際シンポジウムにて

(これらは、優れた海外派遣短期プログラムに対して支援を行う2011年度日本学生支援機構JASSOのショートビジット支援金プログラムに採択されました)。いずれのプログラムでも、期待と同時に不安や戸惑いでいっぱいだった皆さんが、帰国して輝くばかりの笑顔でセンターを訪ねて下さるのは、私たちにとって最大の喜びです。日本にいては決してできないかけがえのない経験が、若い皆さんを大きく成長させてくれることは間違いありません。本書は2010年度交換留学派遣生の留学経験談を中心に、これから留学を目指す方々にとって有益な情報が詰まった冊子になっています。ぜひ参考になさって、一人でも多くの方がお茶大から世界へ羽ばたいてくださることを期待しています。

**交**換留学派遣にあたり、お茶の水女子大学後援会様よりご提供いただいた国際交流事業基金より、多額の奨学金を頂戴いたしました。こうした援助のおかげをもちまして、多くの学生が留学の希望を叶えることができました。この場を借りまして派遣生に代わり厚く御礼申し上げます。

岡村 郁子  
グローバル教育センター講師

# Contents 交換留学派遣生 留学報告書<sup>2010</sup>

## 発刊にあたって

グローバル教育センター長 森山 新 教授

## お茶大からの留学

グローバル教育センター 岡村 郁子 講師

## WHO?

2010年度交換留学派遣生

## WHEN?

交換留学プロセス: Programme Review Process

## WHERE?

交換留学派遣協定校

## HOW?

留学生活の過ごし方、楽しみ方  
2010年度帰国後アンケート集計データ

## WHAT?

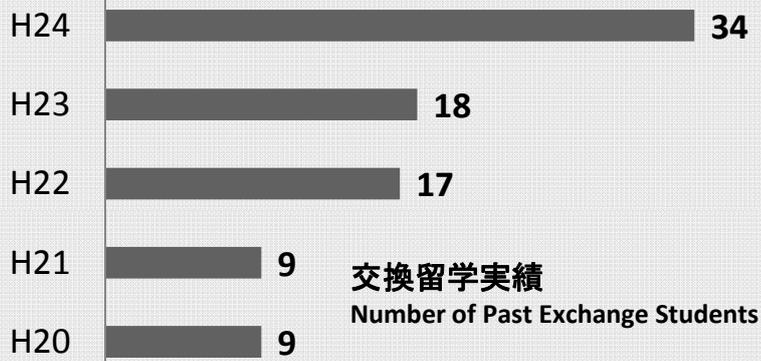
2010年度交換留学派遣生 留学報告書

妹尾 愛美	松田 彩奈
柳谷 萌美	井上 知香
都築 英恵	渡邊 奈津美
西澤 真奈未	奥住 遥
松永 彌有子	水流 みずき
切山 薫子	古橋 まどか
戸羽 美佳	山口 彩
	出貝 朝子

## Editor's Note

Takako Ochi, Associate Fellow, Global Education Centre

## 2010年度 大学間交流協定に基づく派遣学生



妹尾 愛美 (セノオ マナミ)  
北京大学 歴史学系 (中国)

渡邊 奈津美 (ワタナベ ナツミ)  
ブッパートル大学 (ドイツ)

柳谷 萌美 (ヤナギヤ モエミ)  
北京外国語大学 (中国)

吉田 実 (ヨシダ ミノリ)  
パリ・デイドロ大学 (フランス)

都築 英恵 (ツヅキ ハナエ)  
大連外国語学院 (中国)

宮野 友里 (ミヤノ ユリ)  
パリ・デイドロ大学 (フランス)

西澤 真奈未 (ニシザワ マナミ)  
梨花女子大学校 (韓国)

奥住 遥 (オクズミ ハルカ)  
ブレーズ・パスカル大学 (フランス)

松永 彌有子 (マツナガ ミユコ)  
梨花女子大学校 (韓国)

水流 みずき (ツル ミズキ)  
ブレーズ・パスカル大学 (フランス)

切山 薫子 (キリヤマ カオルコ)  
アンカラ大学 (トルコ)

古橋 まどか (フルハシ マドカ)  
ロンドン大学SOAS (イギリス)

戸羽 美佳 (トバ ミカ)  
モナシュ大学 (オーストラリア)

山口 彩 (ヤマグチ アヤ)  
マンチェスター大学 (イギリス)

松田 彩奈 (マツダ アヤナ)  
パーデュー大学 (アメリカ)

出貝 朝子 (デガイ アサコ)  
マンチェスター大学 (イギリス)

井上 知香 (イノウエ チカ)  
タンペレ大学 (フィンランド)

5

交換留学プロセス  
Programme Review Process

留学準備

4月  
『留学説明会』  
交換留学を含む  
お茶大からの留  
学全般について  
の説明会に参加

『交換留学派遣学  
生募集要項』  
配布開始  
応募締切:10月下旬  
学生選考:11~12月  
学内内定:2月

留学決定後

7月  
『国際交流事業基金  
海外奨学金授与式』  
羽入学長はじめ機構長・副学長の  
先生方もご臨席いただき、厳肅な雰  
囲気の中、派遣生1人1人に国際交  
流事業基金から奨学金の目録と賞  
状が手渡されました。

2010年度派遣生奨学金授与式



その他留学前準備

- キャリアカフェ留学相談  
毎週金曜日図書館1Fキャリアカフェで  
出張留学相談を行っています
- English Lunch  
毎週月・金曜日センターで気軽に  
「ランチタイム英会話」

5,6月  
『事前研修』  
4~5回の渡航前研修  
を実施。「異文化理解」  
や「危機管理」につい  
ての指導

留学開始

アジア、アメリカ、ヨーロ  
ッパ等の場合、8月出発。  
オセアニアは翌年1~2  
月出発。韓国は同年度  
内3月からの留学スタ  
ートも可。

帰国後

● 帰国報告会



古橋まどかさん  
SOAS



切山薫子さん  
アンカラ大学

● 交換留学個別相談会

派遣留学生がそれぞれの留学  
先のエリアを中心に、留学に関  
する疑問や悩みの質問に答え  
ました。



松田彩奈さん  
パーデュー大学



山口彩さん  
マンチェスター大学



柳谷萌美さん  
北京外国語大学



渡邊奈津美さん  
ソフィア大学

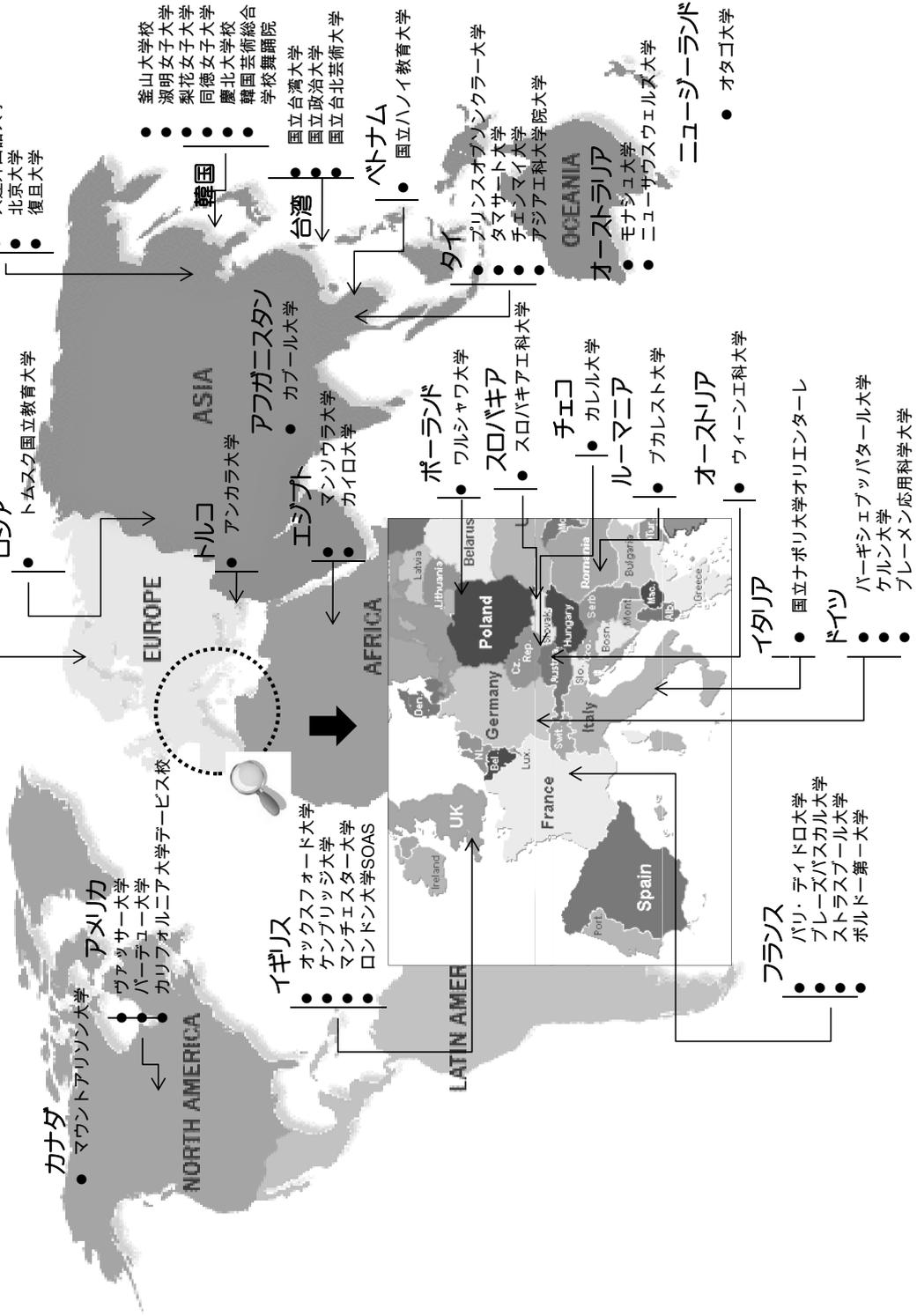
2010年度派遣学生  
から、「危機管理」の  
目的も含めて、月に  
1度、「留学近況報  
告」を開始

# WHERE

## 大学間学生交流協定一覧(部局間協定を含む)

### お茶大 国際交流マップ

大学間国際交流協定大学



7

2010年度  
帰国後  
アンケート集計

## 留学生活の 過ごし方、 楽しみ方

アンケートは将来交換留学を希望する学生への情報提供のみならず派遣生自身の留学の振り返り作業としても重要な過程としています。

1

### 生活について

生活費は1カ月5万円程度。外食せずに特に買い物をしなければもっと安くすむ。住居は大学寮。6~7人で1つのフラットに住む。施設も新しくセキュリティも万全。(イギリス: SOAS、古橋)

生活費は1カ月2,500円ほど。大学の近く中華料理店は1食150円ほど。交通費もタクシーは初乗りが約100円。12月~4月頃までは本当に寒く、マイナス15度まで下がる。体調を崩した時、慌てなくていいように風邪薬や正露丸を持っていると安心する。(中国: 大連外国語、都築)

生活費は1カ月2万円程度。物価は東京の半分弱。住居費は大学が無償で提供。寮はほぼアジア人学生のみでトルコ人学生はいないので留学の効果は薄れる感じ。(トルコ: アンカラ、切山)

物価は日本より安いので3食外食していても1カ月4万円ほど。大学の周りは韓国有数の大学街なので飲食店や洋服屋などのお店も多い。治安も比較的安全でとてもよい雰囲気。寮の申し込みは早い者勝ち。最近は寮にあぶれてしまう人もいるので、留学が決まったら早く申込みをしたほうが良い。(韓国: 梨花女子、西澤)



松田彩奈  
(パーデュー大学)

2

### 学業について

留学後1か月後はフィンランドを集中的に教えてくれるサマースクールを受講。大学院の授業はヨーロッパ社会、福祉社会についてフィンランドの視点から新たなことが勉強できた点で有益。(フィンランド: タンペレ、井上)

授業についていくのはとても大変で、つねに現地学生のノートを借りたり質問したりしていた。(フランス: プレーズパスカル、奥住)

日本では取れない授業も取れたので良かった。自分の専門分野の授業も日本の授業とは違った角度から学ぶことができ、とても有意義な時間だった。(アメリカ: パーデュー、松田)

大学の授業は、最初は語学の問題の上に、授業や課題の形式が日本とは全く違ったので大変だった。(オーストラリア: モナッシュ、戸羽)

### 交換留学生に求められているもの

セミナーでは自分の意見や疑問を発言することが求められた。(イギリス: マンチェスター、出貝)

韓国文化に関する授業では、外部からの視点での意見が求められた。(韓国: 梨花女子、松永)

私の印象では、現地の学生よりも留学生のほうが積極的かつ熱心に授業を受けていました。(フランス: プレーズパスカル、水流)



渡邊奈津美  
(ブツパタール大学)

3

### 留学生活全般

日本語学科が無いため、前年度の交換留学生の紹介により近郊のボーフム大学の日本史ゼミを訪れていた。また、寮やinternational students team主催のパーティなどで現地学生や他の国から来た留学生と触れ合う機会があった。(ドイツ: ブツパタール、渡邊)

Japan Societyという日本に興味がある学生が作るサークルに所属していたので、そのイベント内で友達になることができました。マンチェスターには自分と同じような交換留学生は20人以上います。日本人という居心地の良さになれてしまうと現地の学生と交流を深める障害になりかねません。(イギリス: マンチェスター、山口)

## 中国留学体験記



## 北京大学歴史学系

**妹尾 愛美**  
 文教育学部人文科学科  
 比較歴史学コース

北京大学への留学を決めたきっかけは高校時代の中国史への関心でした。そこから中国語を勉強したい、中国文化を知りたいと発展していき、お茶の水女子大学のオープンスクールで北京大学と交換留学の提携をしていることを知り、その留学を目指してお茶の水女子大学を受験、合格しました。つまり私がお茶の水に来た目的の一つが留学なのです。私はもともと、言語文化学科において中国文化圏コースを目指していたのですが、途中で強い関心がある人文学科の比較歴史コースに転科しました。だから中文生ではないのに中国語系の授業を熱心にとる私は少し浮いていました。中国に対する興味関心を失ったわけではなく、比較歴史の生徒であるほうが北京大学留学に有利だと聞いて思い切って転科しました。そのごたごたもあって留学は3年生の後期からになりました。



留学前の準備は情報が全然足りていなかったためかなり難航しました。私は北京大学ホームページ(中文・英文のみ)を参考にして準備を進めていきましたがもし皆さんが北京大学に留学しようと思う場合は北京大学の担当の先生に聞くのが一番安全だと思います。ただしその場合、先方とは英語もしくは中国語でのメールのやり取りを行わなくてはならないので留学以前から高い語学力が必要になります。または、北京大学日本人留学生会と前もってコンタクトを取っておくといいかもしれません。

留学の準備では書類の準備など時間がかかることが多いので余裕を持って早めの準備を心掛けたほうが安全です。英文の在学証明書などは2週間かかったりしますし、予防接種は1か月空けて3回打たないといけない場合もあります。

留学初めごろは現地の人間との会話がほとんどできていませんでした。しかし中国の人たちの中にも、中国語がうまくできなくても熱心に対応してくれる人もいます。心が折れそうになることもありましたが慣れればどうということはありません。心が折れないよう留学生仲間を作るのも大切だと思います。北京大学には日本人留学生はたくさんいるのでその点では安心です。1年間の留学を終えて得たものは中国語のスキル、異文化への耐性、積極性など様々です。軽い気持ちで留学を行うのはあまり推奨されることではないとは思いますが、あまり気を張りすぎるのはよくないです。大切なのは最後までやり遂げるのだと思います。



## 中国留学体験記



## 北京外国語大学

柳谷 萌美  
文教育学部言語文化学科

「留学は生き方を学ぶ場」—留学経験のある友達が、中国へ旅立つ私に向けてくれた言葉です。10ヵ月間の中国留学を経験して、本当にその通りだなと思いました。私の留学先である北京外国語大学にはアジアをはじめヨーロッパやアフリカなど様々な国から幅広い年代の人が中国語を学びに来ています。そのような自分とは背景が全く異なる人たちと交わることで、他国の文化や価値観に触れて視野も広がり、自分の価値観も変わったと思います。留学期間はたった10ヵ月間だったけれど、日本で過ごした20年をぎゅっと凝縮したくらいに濃い生活を送ることができました。

留学中、最初から最後までずっと楽しかったのかと言えば、実はそうではありません。留学前の私の中国語レベルは簡単な自己紹介ができる程度。言葉が通じない、知り合いもない環境に飛び込んでちゃんと生活できるのか不安に押しつぶされそうでした。いざ中国へ行くと、やはり授業中や友達との会話で中国語が全く聞き取れず、言いたいことも言えず、最初の1ヶ月は辛かったです。しかし週に50分×20コマの授業を予習復習欠かさずこなし、日本人学科の中国人と相互学習も行うことで、1ヶ月も経つと先生の話や9割聞き取れるくらいに耳が慣れ、着実な進歩にびっくりしました。クラスには日本人が私一人しかおらず、毎日嫌でも中国語を使わなければいけない状況におかれたことで、目に見える速さで中国語が上達していったのだと思います。日常会話ができるようになると、友達や店員とも楽しく会話ができ交流の幅が広がります。親密な外国人の友達ができ始めた2ヶ月目くらいから、私の中国生活は一気に楽しくなりました。「もっと伝えたい！もっと理解したい！」という気持ちが、長いスパンでの中国語の勉強モチベーションの維持につながったのだと思います。友達の中には親友と呼べるほど仲良くなった子もいて、友情に国籍は関係ないのだと改めて実感しました。

生活面では中国の物価が安くてとても助かりました。学食は1食10元未満、つまり120円もしません。ですから1ヶ月に1000元（約1万2千円）あれば最低限の生活はできます。北京には日本人がたくさん住んでいるため、日本料理やカラオケ、漫画喫茶もあり、たまに日本シックになった時には足を運びました。中国の飲食店の従業員は無愛想、携帯をいじりながら接客、しまいにはスカイプをしだす。はじめは文化の違いに驚きましたが、今では中国の生活に慣れてしまっただけで日本の過剰なまでのサービスにびっくりするくらいです。ことあるごとに、しかも生活の細部にいたるまでの文化の違いを肌で感じることができるのは、留学の醍醐味だと思います。これから留学に行く方は、留学中は積極的に外へ出て文化の違いを感じ、日本を外から客観的に眺めてほしいと思います。そうすることで初めて自分の進むべき道が見えてくると思います。



留学を通して、語学の面では中国語の国家試験である新HSKにおいて、最高級の6級を取得することができました。また中国国内旅行にもたくさん出かけて、中国人のバイタリティーと雄大な遺跡からパワーをもらいました。笑いと涙の10ヵ月間。たくさんのことを経験して、本当の「自分らしさ」というものを手にした気がします。有意義な留学になるよう手助けしてくださった岡村先生や井神さんをはじめ国際交流チームの方々や家族には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。谢谢。

## 中国留学体験記



## 大連外国語大学

都築 英恵  
文教育学部言語文化学科

初めて一人で飛行機に乗り、中国という国に足を踏み入れた日から始まった約10カ月の留学生活は、本当にあっという間に終わってしまいました。とにかく語学力を身に付けたいという思いから留学を決意した私でしたが、語学力以上に大切なことをたくさん学べた10ヶ月になったと思います。

留学を終えた今の自分と出発前の自分を比べてみて感じる一番変わったと感じるのは、物事や人を理解しようとする時の姿勢です。私が中国に行ってまず感じた違和感がありました。それは、スーパーに行ってもごはんを食べに行っても、店員がにこりもしないことです。そこに日本でいう営業スマイルというものは存在しませんでした。そのとき私の目には、その態度はやる気がないように見えました。しかしそれから何ヶ月も過ぎ中国の生活にも慣れてきた頃、いつの間にか店員の態度にも違和感を感じなくなり、むしろその必要最低限の接客に心地よさを感じるようになっていく自分に気がきました。そして考えた結果浮かんできたことがあります。根本的に違うのはやる気ではなく、人々が求めているものなのではないかということです。私が違和感を感じなくなったのは、店員ににこにこ愛想良くすることを求めなくなったからです。日本人はどこへ行ってもそこで出されるものの質と同じくらい、店員の対応、サービスの質を重視します。もちろんそれは悪いことではないし、丁寧に心のこもった接客は日本の良いところのひとつと言えるでしょう。しかしそれはとにかくスピードを重視するという文化の国では全く評価されないかもしれません。なぜなら、求められているものが違うからです。

日本で良いとされているものがすべての世界で良いとされるとは限らない。考えてみれば当たり前のことですが、知らず知らず日本人の感覚だけで物事を見ていた自分の、視野の狭さを思い知らされました。しかしそれに気付いたことで、私の物事を見る姿勢は大きく変わりました。否定的な見方から入るのではなく、もっと他の視点から見ることはできないか、どの視点から見れば良い部分を見つけられるか、以前よりも様々な角度から物事を見ようとするようになったのです。

そして日本に帰ってきた今も、それは心がけています。広い視野を持って物事を見て理解しようとすることは、必ずしも異文化理解においてのみ必要なことではありません。自分とは違う考え方も肯定し、受け入れる。それは人と人が関わっていく中でも、とても大切なことだと思います。そんな大切なことを、私は留学生活を通して考え、学ぶことができました。心配しながらも今しかできないことをしなさいと送り出してくれた家族、そして準備期間からずっと親身になって相談に乗ってくださった大学の先生方のサポートがあったからこそ経験できたことだと思っています。見守ってくださったすべての人に感謝して、これからもこの経験を活かし、もっともっと広い視野を持った人間になれるよう、努力していきたいと思っています。



## 韓国留学体験記



## 梨花女子大学校

西澤 真奈未  
文教育学部言語文化学科  
グローバル文化学環

留学に行く前の私は、韓国に行ったこともなく、韓国についてほとんど知らない、興味さえもほとんど持っていないという状況でした。そんな私が韓国を留学先として選んだのは、12月に留学が決定した後、すぐに3月から留学が出来るという梨花女子大学の条件に惹かれたからです。また、とりあえずどうしても留学したいという気持ちが強かった私にとって、留学受け入れ人数が多く、語学に関する制限も無かった韓国は、申し込みしやすかったというのが本音です。これ程消極的な気持ちで留学先を選ぶ人も珍しいかもしれませんが、今となっては申し訳ない気持ちにもなりますが、それでもずっと行きたいと思っていた留学に行けるという大きな期待を抱き、そして一方で言葉も文化も全く分からない未知の国で生活することへの大きな不安を抱いて始めた留学でした。

授業は月曜から金曜の午前中に留学生用の韓国語の授業が設けられており、私はレベル1から始めました。日本人3人、中国人3人、アメリカ人2人、ドイツ人2人、フィンランド人1人のクラスでした。レベル1は初級のコーススであるのですが、私たちの先生は英語を使って授業を行っていたので、梨花女子大学への留学を考えている人は、レベル2以上の授業から始めるのが良いかと思います。韓国語のクラスメイトは、毎日一緒に勉強するので、その分絆も強く、授業外でも誕生日会などのイベントを行ったり、休日と一緒に出かけたりと、学校では最も長く一緒に過ごす友だちになると思います。留学を通して韓国のことを知れたことは勿論ですが、色々な国から来たクラスメイトと接し、彼らから母国や彼らの文化のことを色々教えてもらったことで、自分の世界を広げられたと思います。また、夏休みには付属の語学堂で10週間韓国語の勉強を行いました。夏休みは日本と同様に2カ月半あるので、時間の有効活用として語学堂を利用するのも良いと思います。

韓国語以外の授業は、英語で行われる授業と日本語の授業を取っていました。韓国語で行われる授業は理解が出来ないのでそうしていたのですが、英語で行われる授業には帰国子女の学生も多く、ついていくのも精一杯でした。韓国の授業は学生がとても積極的に発言し、それによって授業が進んでいきます。発言回数がダイレクトに成績に結び付く場合もあります。また、最低一回は発表を行わなければならないという授業も多いです。先生主導の日本の授業に慣れていたので、積極的に自分の考えを出す韓国学生姿に驚き、同時に自分もこういう姿勢を身につけなくてはと思われ、刺激を受けました。



半年間の留学生活を通し、たくさんのことを得られました。まず、韓国についてほとんど何も知らなかった私が、韓国を大好きになって帰ってきました。留学前は報道などで繰り返される歴史問題や反日感情などの印象が強かったのですが、韓国に飛び込んで、内側から韓国を見られたことで、色々な角度から韓国のことを知ることが出来ました。そして、韓国人や世界中から来た留学生と接することで、自分の世界を広げられ、また、人と人とのつながりに対する考え方も変わりました。交換留学は半年から一年という時間が限られた中での生活です。どんなに仲が良くなっても、時間がきたら別れなければならないという姿勢を学ぶことが出来ました。韓国は協定校も多く、多くの学生が留学できる機会があると思うのですが、私が留学をした時には、韓国へ留学した学生は私を含めて2人だけでした。英語圏を希望する学生は多くいると思うのですが、韓国留学も英語圏に負けない程素晴らしい経験になると思います。これから、韓国留学をする学生がどんどん増えていくことに期待したいです。

## 韓国留学体験記



## 梨花女子大学校

 松永 彌有子  
 文教育学部言語文化学科  
 グローバル文化学環

私は、大学のサークルで知り合った韓国人の友人達の人懐っこさや、情の深さに魅力を感じ、韓国という国をもっと知ってみたいと感じました。また彼女達の一生懸命に日本の文化や言葉を学んでくれる姿勢が嬉しく、この子たちがこんなに自分の文化を学んでくれるのなら、私も友人として韓国の文化を学ぶべきではないかと思ひ、交換留学を決意しました。2月の末にBUDDYとの顔合わせやオリエンテーションや教養韓国語のレベル分けテストがあり、3月から授業が始まりました。韓国語講座は、月曜から金曜まで、朝8時から朝11時まであります。

## 前期受講科目

教養韓国語(毎日)、General Introduction to Korea(週二回)、テニス、韓国語のクラスは、11人という少人数ながらも国籍が豊かでした。残る2つは学部の授業で、韓国人学生と議論したり、交流したり出来ました。夏休みは大学附属の言語教育院での10週間のコースを受講しました。朝9時から昼1時までみっちり学ぶことができ、韓国語の運用能力はグンと伸びました。また韓国の人々の暮らしを見てみたくて、夏休みだけ学校の寄宿舎を出て、下宿で生活をしました。清潔さや快適さは寄宿舎には敵いませんが、韓国語が耳に入ってきて、朝晩おばさんの作る韓国の家庭料理を食べることができます。

## 後期受講科目

教養韓国語、韓国語発音講座(言語教育院の授業)大学の自習室で勉強することが多かったです。土日を含め毎日朝6時から、夜10時まで空いていて、周りの勉強熱心な学生達の姿にも刺激を受けることのできる、集中して勉強するにはもってこいの環境です。

長期休みやテスト休みなどには旅行にも出かけました。事前に予約をし、パスポートを持っていけば、釜山や慶州、全州へ無料のバスに乗れることができます。また、BUDDYランチというランチミーティングがあり、EWA PEACE BUDDY達が平日、学校の外のお店に連れて行ってくれます。参加は自由ですが、行くと韓国人の友人が増え、梨大生おすすめのお店に行くことができ、楽しかったです。

寄宿舎には洗濯機、乾燥機、掃除機、変圧器などが常備されています。キッチンにはガスコンロやIHクッキングヒーターではなく、電子レンジ、トースター、湯沸かし器、給水機しかありません。電子レンジで簡単な調理をしている人もいれば、学食やコンビニで済ませているという人もいました。一人部屋と二人部屋がありましたが、私は前期も後期も二人部屋でした。お互いに配慮をし、家事を協力したり、毎晩いろいろな話をしたりと仲良く過ごす事が出来、寂しさはあまり感じませんでした。カルチャーショックを感じることも少なくなかったのですが、日本人としてのアイデンティティは大切にしながらも、相手の文化や習慣を尊重し協調していくことを心がけました。そうすることで外国人である私への警戒心を解いてもらい、その上で自己開示を進めることで、信頼関係をスムーズに構築することが出来ました。

到着時のソウルは雪が降っていて寒かったです。空港まで、私の韓国留学のきっかけになった友人の一人が空港まで迎えに来てくれ、寄宿舎の入寮日まで彼女の家泊めてもらいました。また帰国ではもう一人の友人が徹夜で空港まで送ってくれて、感動しました。最初から最後まで、韓国の人々の優しさや温かさに触れた交換留学でした。協力してくださったすべての方に感謝しています。



## トルコ留学体験記



## アンカラ大学

切山 薫子  
文教育学部人文科学科

## トルコでの学生生活

学業としては、トルコ語を一から学ぶためにアンカラ大学付属の語学学校に通い、6カ月間ほど平日9時から1時まで勉強しました。生徒の国籍はシリアなど中東が多いものの、欧米からのビジネスマンもあり、時折教室で宗教や政治の話が白熱するなど刺激的でした。大学では後期から歴史の授業を受講していましたが、未熟なリスニング力では教員がひたすら話し続ける形式の授業を十分に理解することはできませんでした。ただ、そこでのクラスメイトとの出会いは、私の留学に大きな影響を与えました。授業外の時間は、初めのうちはトルコ人の友人もつくれず寮にこもっていましたが、寮の居心地があまりよくなかったこともあり、片言のトルコ語で頻繁に国内を旅行するようになりました。さまざまな地で多くの人と出会ったことで、悪い面も含めてトルコという国をより深く知ることができたと思います。後期に入りコミュニケーションにも自信がついてからは、友人の寮や家に泊まりに行くなど、積極的に様々なトルコ人の生活や考え方を知ることに努めました

## トルコで学んだこと

トルコに留学して常識のもらさを知りました。日本では当然のことがトルコではそうではなく、その逆もまた多くありました。例えば日本では何事も期日を守って計画的に行うことが良しとされますが、トルコでは新学期が始まって1~2週間は先生が大学に来ないため休講になったり、寮の改装工事が寮生に何の連絡もなく始まって急きょ移動を余儀なくされたり、かなりルーズで振り回されることも度々でした。またトルコでは見知らぬ人や知り合って間もない人にも親しげに接することが多く、私は相手の真意をはかろうと緊張の連続でした。中でも最も戸惑ったのは宗教に関する事でした。国民のほとんどがイスラム教徒だとはいえ、一般的にトルコは他のイスラム国に比べてかなり西欧化が進んでいて、飲酒がごく普通に行われ、スカーフを被らない女性が多くいるなどあまり宗教を感じさせません。



ですが、たまたま授業で知り合った学生たちがかなり敬虔なイスラム教徒であったために、なりゆきで一緒にトルコ国内の聖地に行ったり、彼女たちの寮や家に泊まったりすることで、期せずしてイスラムに深く触れることになりました。手助けしてもらったときにお礼を言えば「あなたを助ければアッラーが私を愛して天国に行けるの」などと真剣に言われたり、みんなで楽しそうに踊っている曲の歌詞が「アッラーを愛しています」というものだったり、たじろいだけり苦笑することも多々ありました。イスラムの相互扶助の精神にのっとり、彼女たちはトルコで会った他の誰よりも私を気遣い、助けてくれましたし、悪口や嘘は「教えに背く」と忌避するような真面目さは友人として信頼できました。

互いに理解し合えたといえば嘘になります。私はどれほどイスラム教の素晴らしさを説かれてもイスラム教徒になる気はなく、どこかで彼女たちを冷めた目で見ながらその生活を観察していました。おそらくそれは、薄々彼女たちも感じていたと思います。私も神道や仏教など入り混じった日本文化と自らのアイデンティティを少しでも理解してもらえるよう折に触れて説明したつもりですが、それでも自らの宗教を絶対的に正しいと信じる彼女たちにしてみれば、他宗教の考えは「間違い」としか思えないようで、興味は持ってくれても認めてくれることはないと感じました。お互いを理解し認め合う、ということは本当に難しいと今回の留学で痛感しました。文化と文化、個人と個人が接する中で、互いにどうしても受け入れられない部分は出てくるのだと思います。それは今回の私の留学の中ではトルコ人の時間や規則に対するルーズさであり、宗教に対する見解の相違でした。外国人というマイノリティの立場では社会に溶け込むためにより譲歩せざるをえませんが、無理せず互いに受け入れられる部分から関係を深めることが大切だと感じました

## オーストラリア留学体験記



## モナシュ大学

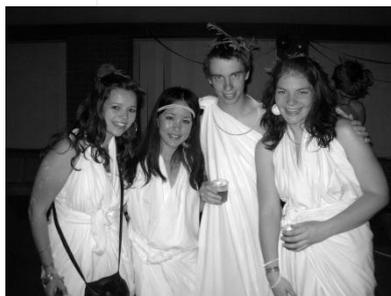
戸羽 美佳  
生活科学部人間:環境科学科

私は2011年2月から11月にかけて、オーストラリアのメルボルンにあるモナシュ大学に留学した。小学生の頃からずっと夢見てきた留学について行けることになり、胸は不安よりも期待でいっぱいだった。実際に行ってみると、語学の壁や異文化に適應する難しさはあったが、本当に毎日楽しく学びや成長で満ち溢れた、今までの人生で一番濃い一年となった。今回は、勉強、放課後・週末、休暇、についての体験を、私がそこで学んだことと一緒に書きたい。



まず、授業は語学面だけでなく、課題もたくさんあり、グループワークも多かったため、日本で受けてきたものよりもはるかに厳しかった。特に、建築の授業で毎週与えられていた200語のエッセーは、地獄のようだった。しかし、授業の担当教授がとても親切な方で、エッセーの内容だけでなく、書き方についても毎週手厚く指導していただき、当初は苦痛だった授業が楽しみになるくらい好きになった。向うの大学は、教授と生徒との距離がとても近いので、助言が欲しいときやわからないことがあれば、躊躇わずに話しに行くことが一番良いと思った。

また、留学先ではオリエンテーションを始め、イベントが多く、寮生や交換留学生、学校全体で友達の輪を広げられる機会がたくさんあった。個人が開くパーティーも含め、全くつながりのない人や、友達の友達と仲良くなる機会が日本よりたくさんあるため、様々な趣味や特技、専攻、職の人と出会うことができ、私自身の視野も広がった。放課後や週末は、寮の友達と一緒にご飯を作ったり、映画を見たり、街に遊びに行ったりした。私の寮は160人の寮生で1つの大きなキッチンを共有していたので、寮生同士とても仲が良かった。また、オーストラリアでは日本食がとても人気で、寿司スタンドがキャンパス内にすらあった。なので、友達から日本食を作るよう頼まれることが多く、日本でもう少し練習して行けばよかったと思ったほどだ。



留学してたくさんのことを学んだ。その中でも、様々な経験を積み、様々な人と出会い、自分が育ってきた環境を客観視できるようになることの大切さをすごく感じた。留学に行って、今までの自分の視野の狭さに気付かされた。つらいこともたくさんあったが、留学を通して得た教訓は今後も生きてくると思う。

## アメリカ留学体験記



## パーデュー大学

**松田 彩奈**  
 文教育学部言語文化学科

私のPurdue大学での1年間は、勉強、文化、精神、健康...など、多方面から成長することができた、かけがえのない1年間となりました。まず、一番大変だった学校での勉強について話します。前期は女性学の授業が大変でした。毎週3~4枚ほどのペーパーを書かなくてはならず、テストでは、約20枚のエッセイの提出がありました。最初は先が見えず大変でしたが、友達と24時間図書館にこもったりして、終えることができました。図書館はテスト前に24時間開いていてとっても良かったです。後期には、国際経済学に近い授業をとり、発展国と発展途上国での貿易を学習しました。日本のこともたくさん出てきて、教授、テキストの視点から見ることができました。また、前期後期を通して中国語をとったことはよかったです。授業では、とにかく声に出して学習し、先生がよく生徒に発言や発表させる場が多かったです。なので、日本で学習した中国語の文法、単語をアメリカでコミュニケーションの道具として改善できました。

私はPurdueで2人部屋の寮で1年間生活しました。ルームシェアには意外とすんなり慣れることができました。というのも、私はルームメイトに恵まれたからだと思います。ルームメイトとその家族は私にとっても親切にしてくれました。私が初めて部屋に入った時に、ルームメイトの家族からのたくさんのお菓子とプレゼントとメッセージカードを私の机の上に発見した時の光景はとっても嬉しくて今でも忘れられません。ルームメイトは日本のアニメや音楽が好きで、すぐに打ち解けることができました。困ったことがあると助けてくれ、授業から部屋に戻るとその日あったことなど、面白いことを話して笑っていました。Purdueで記憶に残る、精神的に大変だったことがないのは、ルームメイトや友達に恵まれていたからだと思います。

長期の休暇では、クリスマスはルームメイトの実家に行かせてもらいました。また中学生の時にホームステイでお世話になった家族にアリゾナまで会いに行き、6年ぶりに再会しました。彼らは2人の子供を養子として受け入れており、生みの親と受け入れ側が互いに面識があったうえで行われるオープンアダプションでした。私は2人の母親が話し合う場にもいいよと言われ、時々感情的になってしまう2人の立場を目の当たりにし、考えることがたくさんありましたが、最終的には、2人の母親が強い絆で結ばれていることが大切で、親も子供も幸せに暮らす鍵なのだと思います。

この1年間では、スカイダイビングをしたり、本物の銃をshooting rangeで撃つたりと、貴重な体験ができました。特にスカイダイビングは、最初自分で計画したのですが意外と友達がたくさん集まり、みんなで計画してやっとできたときは、達成感でいっぱいでした。私は交換留学を始める前、留学中は気分が落ち込む時期、ホームシックなどはあるものだから、あっても深く考え込まないようにしようと決めていました。しかし、この1年間でホームシックになることも、気分が記憶に残るほど落ち込んだことも全くありませんでした。日本に帰るときは、本当に帰りたくなくて、その時一番落ち込みました。こんなに楽しむことができたのは、私の友達、お茶大でサポートしてくれた先生方、家族のおかげだと思っています



## フィンランド留学体験記

## + タンペレ大学

**井上 知香**  
 博士後期課程人間発達科学専攻  
 保育・児童学領域

タンペレ大学は毎年交換留学生を400人ほど受け入れます。そのため、学外では学生が企画する留学生のためのイベントが多くあったり、学内でも個々の留学生に担当のコーディネーターの方がつくなど、留学生への支援や対応は手厚いものがありましたし、留学生に向けた英語で開講される授業も多くあります（母語はフィンランド語）。またその授業も学部を超えて幅広く受講することが可能です。日本のように講義を受けて試験またはレポートで評価するという一様な授業スタイルのみではなく、例えばあらかじめ指定された図書を各自で勉強し、試験日に試験を受けることで単位が取れる仕組みや、講義と小グループでのディスカッションが隔週ごとに組み合わせられた授業、フィールド体験やプレゼンテーションを重視した授業などと、楽しく学ぶための様々なスタイルがありました。



留学生活の中で何に重点を置きたいかで自分の大学生生活のスケジュールを組み立てられるシステムが確立されていると感じました。私は授業とは別に、現地の保育所で観察する機会を得たいと思っていました。そのことで担当のチューターや学科の先生が尽力してくれ、出会いに恵まれ観察する園を見つけることができ、月2回のペースで通わせていただきました。自分が求めることには、それが叶うにしろ叶わないにしろ、責任を持って応答してくれるフィンランド人の自立した姿がそこにはありました。またこの姿が、フィンランドの保育や教育が求める人間像でもあることに、その後知ることとなりました。

日本にいた時の私の交換留学のイメージは、海外の大学で勉学をする、様々な国の人々と知り合い異文化を知る、といった何か特別なものという印象をもっていました。旅を終えて振り返ってみると、私は何か特別なことをしに行ったのではなく、土地を変えた“日常生活”を営んできたのだと思います。その淡々と日々営まれる生活の中に、今まで私が体験し得なかったものが表れたり、フィンランド人の日常生活に触れると、それが大切なこととして残るのです。その機会に恵まれたのがフィンランドでの交換留学なのでした。11月から雪が降り始め5月まで雪が解けません。-30度近くまで行く日々も続きます。長い長い冬を越え、春の芽吹きを迎え、2か月ほどの短い夏を人々は存分に楽しみます。生きる（寒い冬を乗り越える）人々の知恵、太陽の恵み、家族、人々のつながりや温かさ、自分のリズム、日本では気づきにくくなっていることに気付かされた10か月でした。

さて、当初の問いであったフィンランドの保育所で子どもがどう過ごしているかについてですが…子どもたちは、なにか教育的なものを与えられる場にいるといった感じではなく、その場所で自分の場が守られながら生活をしていました。私がフィンランド生活で実感した、人が生きることを忘れていないその姿勢が、フィンランドの保育の根底に流れていると感じることとなりました。フィンランドの保育所で見てきたこと感じてきたことをどう言葉にしていけばいいのか、いまだ模索を続ける毎日です。



## ドイツ留学体験記


 ブッパータル大学

**渡邊 奈津美**  
 文教育学部人文科学科  
 比較歴史学コース



「留学？なぜ、ドイツなの？」—留学に行く前も、帰ってからもこの質問には何度も出くわした。高校の頃、ドイツの哲学者たちの思想を熱心に教えてくださった先生の影響で、ドイツに自然と興味を持ったのがきっかけで、お茶大でもドイツ語を選択し、ドイツ史の授業を受け、2年生の夏休みには文部科学省主催の「日独学生青年リーダー交流派遣事業」に参加した。実際にドイツを訪れ、ドイツの若者たちと触れ合い語り合った経験から、小さい頃からの夢だった留学先をドイツに決めた。留学するに当たって、一番心配だったことが語学面だったため、12月に派遣決定の通知を頂いてからはドイツ語の勉強に力を入れ始めた。1年生のときに第二外国語で履修していて基礎文法は理解していたが、会話や長文にはほとんど取り組んだことが無かったため、長期休みには日独協会の会話教室に通い、学期中には大学のドイツ語の授業の予復習を中心に勉強した。

一人で海外へ行くことも一人暮らしをするのも初めてだったため、最初は慣れないことやわからないことだらけで、とても不安だった。だが、大学の留学生サポート団体や、同じ寮に住んでいたドイツ人学生が、私が生活を始めるに当たっての準備を手伝ってくれ、困ったことがあればすぐに相談できる環境が整っていた。ドイツでは学生同士のつながりがとても強く、寮で同じ階に住んでいた友人たちはまるで家族のようにとっても仲が良く、どこの国から来た留学生でもいつも温かく接してくれた。クリスマスやイースターの時には実家に招いてもらい、ドイツの伝統文化に触れる機会を作ってくれたり、みんなで一緒にパーティーを企画したりしたことはかけがえの無い思い出になり、人の温かさというものを肌で感じる事ができた。

私は秋学期は大学の語学コースでじっくりドイツ語を習得することに費やし、春学期から語学コースと平行して専攻分野の講義に出席した。語学コースでは、様々な国からのクラスメイトとドイツ語漬けの毎日で、この4ヶ月弱で大分運用能力が上がったと感じた。しかし、やはり春学期の専門の授業に最初はついていくのがとても難しく、ドイツ人学生にノートを見せてもらったり、ランチタイムに質問に答えてもらったりして、なんとか内容を理解しようと努力した。また、担当の教授も「授業に限らず、わからないことや困ったことがあったら力になるから、何でも相談して！」と、とても親切にして下さり、本当にうれしく感じた。そのおかげもあって、徐々にではあったが講義の内容を聞きながら理解できるようになり、学期末にはレポートを提出し単位を取得することができた。

10カ月の留学生活で、本当に多くの出会いと別れがあった。そのどれもが、今の私に大きな影響を与えてくれたと思う。もう会えないかもしれない人もいるが、この縁はずっと大切にしていきたい。それぞれ多様なバックグラウンドを持つ彼らからは、ここには書ききれないほどの優しさや親切心もらった。ホームシックの時にずっと話を聞いてくれた時も、私のつたないドイツ語のレポートを一緒に推敲してくれた時も、食堂でお昼を食べながらお喋りしていた時も、周りにはいつも彼らがいた。もちろん文化や考え方の違いに戸惑ったこともあるが、それでもお互いに歩み寄る姿勢や、寛容さを持つことの重要性を覚えてもらった。学業面、生活面両面で、私が留学生活が充実したものだったと言える理由は、やはり彼らの存在だ。この貴重な経験を、これからの大学生活、また社会に出てからもしっかりと活かし、還元できればと思っている。

## フランス留学体験記

## ブレーズパスカル大学

奥住 遥  
文教育学部言語文化学科  
仏語圏言語文化コース

チーズに愛情を注ぐフランス人、暇さえあればカフェでおしゃべりするフランス人、ストばかりで働かないフランス人、“日本人”の私からすると、“フランス人”の文化は不思議で面白くてときには受け入れ難いものでした。しかし、それらは本当に“フランス人”の文化だったのでしょうか？



マーケティングの授業を受けていた際に、些細なことがきっかけとなり「そのアジア人、俺のフランス語がわからないなら授業に来るな。家に帰れ！」とフランス人教師に怒鳴られたことがありました。私のフランス語のレベルは授業を全て理解できるほど十分なものでなかったのは確かですが、そのあまりの理不尽な怒られ方はどう考えても納得できるものではありませんでした。フランス人もフランスもその全てを嫌いになりかけましたが、この出来事に悩み落ち込んでいた私を助けてくれたのも、フランス人達でした。この出来事が起きる前から、私が授業についていけないようにと家に私を招いてまで授業の解説をしてくれていた友達、怒られて落ち込んでいた私を元気づけようと映画に誘ってくれた友達、彼らはいつも、私が困難に直面したときに優しい手を差し伸べてくれました。

私たちは、国籍が違う個人とコミュニケーションをとるとき、どうしてもその人自身の言動をその人の国の象徴として理解してしまいがちですが、日本人のなかにも様々な考えを持った人がいるように、“フランス人”のなかにも、彼らを一言ではくれない多様性がありました。誰かと付き合っていくとき、相手のバックグラウンドを理解したうえで、その人自身と正面から向き合っていくのは、一見簡単そうに見えて、実はとても難しいことだと日々実感しています。それでも私は、それぞれの人との貴重な時間に感謝しながら、例えば言語や国籍や価値観が違うもの同士であっても、相手と正面から向き合い続けていきたいです。



## フランス留学体験記



## ブレーズパスカル大学

水流 みずき  
 文教育学部言語文化学科  
 仏語圏言語文化コース

私は文教育学部の言語文化学科仏語圏言語文化コースに所属しており、大学で学んだフランス語力を試してみてもさらに向上させたいという思いと、フランスではどのようなフランス文学の授業がされているのか知りたいという思いから交換留学の申し込みをすることに決めました。

留学中の授業の様子や、友達との交流についてです。ブレーズ・パスカル大学の授業は9月下旬から始まる予定だったのですが、その前に大学付属の語学センターに通うために8月下旬に渡仏しました。海外は初めてだし、2年しかフランス語を勉強していなかったため、語学は非常に心配していました。1カ月間は朝から夕方まで毎日そのセンターに通い、外国語をしゃべることにはだいぶ慣れました。また、週に1回はその地域の観光地のようなところに連れてってもらい、その地域にも慣れ、またいろんな国の人と交流する機会がありました。9月下旬からは大学の授業が始まりました。私は18～19世紀のフランス文学を学びたいという希望を出していて、交換留学生なので学年に関係なく、私の興味に合ったものを選択して授業を受けることになりました。聴講か単位をとるかも自分で選ぶことができ、私はしばらく授業を受けて単位をとれそうにないなと思ったため、聴講を選びました。この大学の授業については、留学生向けの授業ではなく、もちろん語学センターの授業のように先生がゆっくりしゃべってくれるわけではないし、難しい単語は出てくるので最初はまったくわかりませんでした。とりあえず毎回授業に出て、聞き取れた内容をメモするというのを繰り返しました。

そうすると、語学センターでの学習も続けていたこともあって、最後のほうはだいぶ聞き取れるようになりました。また授業内容の理解のために、同じ授業に出ているフランス人にノートを貸してもらって写し、自分が聞き取れなかった部分の復習をしました。

9月下旬からは語学センターでの授業と大学の授業を並行して受けていて、大学での授業がほとんど聞き取りなのに対して、語学センターの授業はしゃべることが多かったです。クラス内でテーマを決めてディベートをしたり、自分の国の文化についてプレゼンテーションをしたりもしました。次第に語彙が増え、しゃべることができる内容や表現が増えていくのを感じ、毎日楽しかったです。また、語学センターにはいろいろな国からフランス語を学びに来ている生徒がいたので、彼らと交流するのもとてもいい経験でした。授業以外の課外活動についてです。大学から国際交流機関を紹介されたので、登録をし、イベントにはなるべく出席するようにしていました。語学センターよりもいろいろな語学レベルの人や国籍の人がいて、いい刺激になりました。毎回行くうちに準備や企画のお手伝いをさせてもらえることになり、私にとって最後のイベントであったクリスマスパーティーには開催する側として参加しました。この留学という経験を経て、私は語学力だけでなく、積極性や自律性、また大切な友達などたくさんものを得ることができました。これらは日本では得られなかったものかもしれないし、自分が成長したことを実感できたということで、私にとって留学はとても大切な経験でした。



## イギリス留学体験記



## ロンドン大学SOAS

古橋 まどか  
文教育学部人間社会科学科  
グローバル文化学環

大変だったことは何よりも勉強です。授業時間そのものは短めですが、毎週課されるリーディングと、クラスによってはプレゼンテーション、学期末のエッセイなど、現地の学生でもストレスになるほど厳しかったです。当初は英語もままならないので、特にチュートリアルと呼ばれるディスカッションのクラスが全く聞き取れず、また私は2年生以上の授業を受講したため他の学生が共有している授業に内容に関する基礎知識もなく、クラスで一人取り残されたように感じたこともありました。そしてなにより一番ショックだったことは、クラスメイトや教授がそんな私に全く興味を示さないように見えたことです。なんて皆冷たいのだろうと、落ち込んだことを覚えています。しかし、時間がたつにつれこれは誤解であったことに気がつきました。考えてみれば、彼らにとっても交換留学生である私はどう接してよいか分からない存在であることは自然なことで、思い切って挨拶などしてみれば、実は皆とても親切でした。SOASは特にアジアやアフリカに興味がある学生ばかりなので、色々興味を持って自分の話を聞いてもらえる機会が多いと思います。



また英語力の向上に従いディスカッションも聞き取れるようになり、私は親切な教授に恵まれたので、分からない部分は質問などすることで、授業にも次第についていけるようになりました。学問的な面でこの1年かんで学んだことは本当に多く、大量の文献購読から得た知識、思考力から論文の書き方などは、帰国後の勉強にも大きく貢献できると思います。

一方、居心地のよかった点は何よりも友人関係です。SOASはとても留学生の多い大学で、ヨーロッパを始め世界中から生徒たちが来ています。イギリス人のみならずそのような留学生と、お互いの国についてや、自分たちの将来についてなど、色々なことを語り合う時間はとても貴重なものでした。日本語を学んでいる学生や日本に興味のある学生も多いので、現地の学生とも仲良くなりやすいと思います。また私は大学の寮に住んでいたため、時々開かれるキッチンでのパーティーに参加して色々な友達を作ることができました。彼らとは帰国後しばらくは会えませんが、きっと一生の友人になることと思います。また、ロンドンという街自体も私にはとても居心地よく、イギリスの歴史的な文化物に加え、多くの移民たちによる多文化に満ち溢れ、活気のある街でした。日本食の手に入るスーパーマーケットやレストランもあるので、その意味でも暮らしやすいところだと思います。SOASもロンドンもイギリス的なものを学ぶというよりは、国際的で多文化な空間に身を置くということを学ぶことに適した場所だったと思います。



この一年間、私の頭にいつもつきまとっていたのは、「私は本当に有意義な時間を過ごしているのか」という問いでした。多くの学生が留学する現在、ただ単に留学したという事実ではなく、留学して何を得たかということが大切だと思っていたからです。また、留学前は勉強がここまで大変になることは予想していなかったため、こんなに勉強ばかりしていてもっと出かけたり人と接したりしなくていいのだろうかと思ったこともあります。しかし今思えば、一口に充実した留学生活といっても色々なありようがあります。人と違うことや、留学前の予定と違うことは気にせず、目の前にあること、自分が興味のあることに正面からぶつかれば、それは自分にとっての最高に充実した生活になっていくと思います。私にとっては、勉強の大変さと友人関係の居心地よさとのギャップこそが、充実した留学生活を送れたことの何よりの証拠なのかもしれません。

## イギリス留学体験記



## マンチェスター大学

山口 彩  
文教育学部言語文化学科

私の留学したマンチェスターは、イギリスの中でも大都市に分類され、その昔産業革命が起こった場所だということは皆さんよくご存じでしょう。大都市と言っても、日本のそれよりだいぶ規模が小さく、とても落ち着いた雰囲気のある街です。市内に大学が三つもあるため、学生街のような雰囲気さえ感じられます。週末になると、通りに露店があふれ、新鮮な食材を売る声や、ストリートパフォーマーの奏でる音楽が街に響き渡ります。そして、さすがイギリス最強のフットボールチームを持つ街だけあって、大きな試合が近づくと、通りはフットボールファンの熱気に包まれます。

さて、私の留学生活は不安の面持ちの中でスタートしました。私の寮には日本人が他に一人もおらず、最初とても寂しかったのを覚えています。ですが、新入生歓迎ウィークが始まると同時に、様々な国からの留学生に出会い、自分は決して一人ではないと実感しました。私はJapanese Societyというサークルに所属していて、その中で他大学出身の日本人学生や、現地の日本語を学ぶ学生たちと親交を深めることが出来ました。私の友達には本当に多国籍で、具体的にはイギリス人、ドイツ人、フランス人、イタリア人、リトアニア人、アルメニア人、カナダ人、インド人、中国人、ギリシア人などの友達が出来ました。このことから分かるように、イギリスは本当に多民族国家です。現地でイギリス人だけでなく、様々な文化背景を持つ友人と交流する中で、異文化や異なる考えを尊重する多文化共生の精神を培うと同時に、本当に濃密な関係を築くことが出来ました。



イギリスで一年間教育を受けてみて、得たものも大きかったです。日本とイギリスの教育システムは全くと言っていいほど異なります。イギリスでは日本という高校の時から専門教育に入ります。そのため、同学年でも日本人よりはるかに物事を深く、そして批判的に捉える力があります。大学の授業も、日本のように受け身的なものではなく、積極参加型のものがほとんどでした。レクチャーを聴いたあとで、セミナーかチュートリアルと言われるディスカッションに参加し、その中で決められるグループごとに一つのテーマを決めて研究に取り組み、最終的に皆の前でプレゼンテーションをすることが求められます。慣れない環境の中で苦勞した分、やり終えたあとに、とても大きな達成感を味わうことが出来ました。



住み慣れた母国を離れることで、改めて違った視点から日本を眺めることも出来ました。イギリスで生活をしてみて、日本の良い点も悪い点も見えてきました。良い点としては、「日本はとにかく便利」ということです。イギリスとは違って、公共交通機関はほぼ定刻通りに来るし、カフェでコーヒーを注文しても長く待たされることはありません。ただ、裏を返せば、日本人は時間や効率というものに縛られすぎて、もっと大切なものを見失いかけてきているとも言えます。一年間という短い期間でしたが、いろいろな体験をする中で、様々な発見をし、そしていろいろと考えさせられる留學生活でした。

## イギリス留学体験記



## マンチェスター大学

出貝 朝子  
文教育学部言語文化学科  
英語圏言語文化コース

交換留学にあたって私が目的としていたことは、多様な文化的背景をもつ人々がいる環境の中で、互いの立場を尊重したコミュニケーションをすることで。マンチェスター大学は、学生寮も学部も規模が大きいので、多文化だけでなく多様な考えを持った人々と交流する機会に恵まれました。特に寮では、現地での生活に慣れてからは友人と色々な話ことができました。



学業の面では、専攻コース以外にも関連の深いクラスを受講することができたので、自分の専門を体系的に新しい視点で学ぶことができ、どのクラスも刺激的でした。このことは私が交換留学できて良かったと思えることの一つです。大変だったことは少人数のセミナーで自分の考えを話すことでした。同じグループの学生の話聞きそれに反応しながら自分の意見を述べるのは困難で、毎回気が引けました。しかし留学生である自分に対して特別何か考慮があったわけでもなく、そのおかげでかえって開き直って議論に参加できたという部分もあったと思います。



振りかえって、私の設定した交換留学の目的は達成できたと思います。留学生として、外国人として、人と接することには、より多くの自分の立場の説明や相手への質問が必要でした。加えて英語の壁があったため一層人と接することに必死になる場合が多かったです。そうした環境で、立場を尊重しあうコミュニケーションの態度を学べたことは私が交換留学において見出せた一番の価値となりました。



帰国報告会にて  
発表する出貝さん

## 国際交流活動 & 主な刊行物



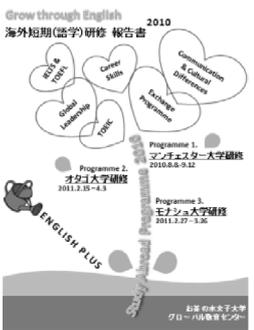
### 交換留学を目指す人のために STUDY ABROAD HANDBOOK 『海外留学の手引き』

お茶大交換留学の流れ(学内選考から決定まで)や協定校の概要など詳しく掲載されています。



### 交換留学派遣生の「声」 お茶の水女子大学 『交換留学派遣生 留学報告書』

派遣学生の留学レポート。留学生活の過ごし方、楽しみ方など留学を実現したお茶大生の留学体験談です。



### 短期語学研修の情報 Growth through English 『海外短期語学研修 報告書』

オタゴ、モナシュ、マンチェスター短期語学研修の情報。研修参加者のレポートが満載。



### お茶大からの留学がすべて魂に分かる！ STUDY ABROAD NEWSLETTER

交換留学協定校の紹介、交換留学派遣活動報告、短期海外研修活動報告、などお茶大からの留学のすべてが分かります。

### 世界8大学合同国際学生フォーラム 「東日本大震災の復興を考える」

2012年3月10日から18日の期間、グローバル教育センター主催、「東日本大震災の復興を考える」国際学生フォーラムが行われました。各国から2名の学生が来日、それぞれの国で東日本大震災がどのように報じられ、受け止められたかを報告、また、地球規模の大災害に世界の若者は何かできるかを、英語、日本語、その他、多言語でディスカッションを行いました。

このフォーラムは、平成23年度日本学生支援機構留学生交流支援制度(ショートステイ)SSプログラム奨学金に採択されており、同機構からの支援を受けて実施されています。



フォーラム開催第1日目  
「3.11をここに刻む」追悼イベントに参加



フォーラム開催第2日目  
モナシュ大学とのテレビ会議



### Up-and-Coming for your study abroad experiences



#### 4W1H & Why analysis

If you are a first time reader, welcome to the second issue of our study abroad annual report. If you are a return visitor, welcome back! What you are reading is not just concerning the students' new language and culture acquisition experiences but about themselves. The simplest 4W1H (who, when, where, what and how) questioning framework presented in this report is an in-depth analysis of the study abroad experiences of 15 Ochanomizu students. What does study abroad mean to them, how does it change them, what did they learn, and how is their study abroad experience affecting their future career goals and plans? Furthermore, their reports state "WHY" study abroad is beneficial, academically, personally and professionally. It is interesting to know about their study abroad experiences as well as the "changes" in their overall lives the experiences have made.

#### "Yes you can!"

Studying abroad is the power of "Yes you can". Why can't you study abroad? There are a few reasons behind "can't", such as worry about money, language proficiency, difficulties concerning emotional stability while abroad. But, you can still make it happen. Let's begin the self-analysis, using 5W1H approach! Naturally, "WHY" is the most important first step.

The will has power – where there is a will there is a way.

*Takako Ochi*

Associate Fellow, Global Education Centre  
Ochanomizu University



**STUDY ABROAD**  
**ANNUAL REPORT 2010**  
Experiencing the World

**WHO**  
**WHAT**  
**HOW**  
**WHEN**  
**WHERE**

**お茶の水女子大学 交換留学派遣生 留学報告書**

---

発行日: 2012年3月30日  
発行: お茶の水女子大学グローバル教育センター  
〒112-8610東京都文京区大塚2-1-1  
Tel/Fax: 03 - 5978 - 5913  
監修: 森山 新 (グローバル教育センター長)  
編集: 岡村 郁子 (同センター講師)  
越智 貴子 (同センター、アソシエイト・フェロー)  
印刷・製本: よしみ工産株式会社